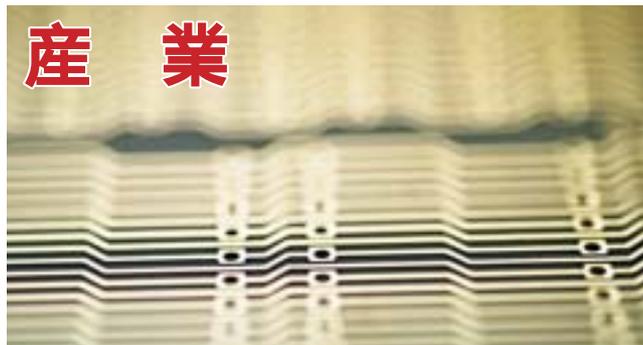


# 最上川と私たち

シリーズ・その

世界の四大文明は、ナイル、チグリス・ユーフラテス、インダス、黄河という河川の流域から起こっている。山形県の歴史も最上川とともにあり、人々は最上川を「母なる川」と呼ぶ。自然環境も暮らしも産業も文化も最上川を抜きに語れない山形県なのだが、県民は果たして最上川の何を受け継ぎ、何を未来に伝え、人と川とどのような関係を構築しようとしているのだろうか。最上川をテーマに、山形県の未来を考え、在るべき県土をイメージしてみよう。この欄は、「県民の川・最上川」についてシリーズでリレー執筆する。多くの県民の方々と一緒に考えたい。

## 産 業



秋も深まったころ、週末の河川敷では山形の秋の風物詩“芋煮会”の光景がそこかしこで見られた。季節柄、スポーツや散策など、レクリエーション活動を行うには河川敷ほどうってつけの場所もないだろう。最上川本川とその支川沿いには全部で28ヵ所の河川公園がある。私たちにとってはどれも心と身体を癒してくれる貴重な生活資源だ。現在、最上川の流域内では県民のおよそ8割、約100万人が暮らしているが、このことから考えてみても、県民の生活が最上川と密接なかわりを持っていることに気付くだろう。

ところで、県内は地域ごとに地理的条件や歴史的な生い立ちなどを異にする場合が多く、時として地方色に富んだ県だと言われる。言い換えれば、県民としてのアイデンティティーが育ちにくい土地柄だとも言えよう。特に内陸地方と庄内地方ではその傾向が顕著で、言葉一つを取ってみても「山形県民」とひとくくりにしてしまうのはいささか乱暴ではないかと違和感すら覚えてしまう。

にもかかわらず私たちは最上川を“母なる川”と呼び、古くから慣れ親しんできた。多様な県民性を持つてはいるが、一方で共通のアイデンティティーもしっかりと持っているようだ。

「最上川と私たち」最終回は、私たちの生活と最上川との接点について「産業」という視点から歴史という時間軸も織りまぜながら見つめ直してみたい。私たちの暮らしを支える数多くの産業が少なからず最上川によって支えられていることに気付くはずである。

## 暮らしを支える漁業

本県にまつわる歴史をひも解けば、最上川と深いかわりを持つ産業史が数多く存在しており、有史以前にまでさかのぼることができる。およそ4千年も前に「産業」があったと言われればにわかには信じがたいのだが、シリーズ・その で紹介した「縄文のヴィーナス」は当時の様子を静かに物語っている。

「縄文のヴィーナス」が最上川の支川である小国川左岸の西ノ前遺跡で発見されたように、県内で発見された縄文期や弥生期の遺跡の多くは最上川本川やその支川付近に点在している。水稻農業が伝わったとされるのは紀元前300年頃であるので、それよりも前からすでに最上川付近では人々が生活を送っていたことになる。言うまでもなく狩猟中心の生活を送る彼らにとってサケやマス、コイなど、最上川で採れる川魚は貴重なタンパク源であったはずだし、何より最上川漁業がすでに存在していたと考えれば、最上川の水質（みなも）はまさしく“母なる川”のたたずまいを見せていたに違いない。

最上川沿いの町、白鷹町では今でも当時の面影をしのぶことができる。ヤナ公園に設けられた日本一と言われる巨大な“ヤナ場”では伝統漁法の一つであるヤナ漁が見物できる。ヤナは川の中央部に斜めに組んだ骨組みの上にフィルター代わりのすのこをかけたもので、川の中を泳ぐ魚が自然とすのこの上に揚がってくる仕組みになっている。白鷹町では今年も9月に「最上川鮎祭り」が開催され、ヤナ場では落ち鮎漁が体験できるとあって多くの観光客で賑わいをみせた。時代の移り変わりとともにヤナ場の持つ意味合いも変わってきているようだが、それでも地場産業として最上川漁業がしっかりと根付いていることを感じさせてくれる。

ちなみに、現在の最上川漁業の実態は「山形県農林水産統計年報」によって知ることができる。これによれば、平成15年時点における漁獲量は年間399トンとなっており、沿岸・沖合・遠洋漁業に養殖業を含めた本県の総漁獲量7,922トンの5%を占めている。今でこそ川をのぼるサケの数はめっきり少なくなってしまい、サケ・マス漁はその姿を消しつつあるが、今なお最上川漁業が私たちの暮らしを支える重要な産業であることに変わりはない。

## 社会発展の礎、最上川河川工事

“教育”や“民主主義”など社会の発展を促すキーワードはさまざまあるが、“インフラ”もまた欠かすことのできない重要なキーワードの一つであろう。私たちの生活は最上川によって支えられているが、同時に最上川というインフラを維持しなければならないということも忘れてはならない。

古くから最上川はいくつもの改修工事が施されてき



最上川にかけられた“ヤナ場”(白鷹町「ヤナ公園」)

た。中でも、県の産業史を語る上で特にエポック・メイキングな工事として知られるものは江戸時代初期に集中して行われている。とりわけ、最上川舟運の全面的な開発は灌漑用水堰の開発と並んで各藩の主要な課題でもあったことから、舟運の障害物の除去や舟着場の整備等に関する記録は今でも数多く残されている。

たとえば、山形藩主最上義光公は基点・三ヶ瀬・隼のいわゆる“三難所”(村山市)の大規模な開削工事(1596~1614年)を手がけている。その名の通り、三難所付近は流れが急なことから破船事故も多く、村山・最上から庄内・由利郡までを治める義光公にとって、領国内の安定した流通基盤を確保することは重要な課題であったに違いない。また、米沢藩の御用商人西村久左衛門はもう一つの難所とされる五百川峡谷、特に黒滝(白鷹町付近)の開削工事(1693~1694年)を手がけている。この開削工事には総工費なんと1万7,000両(現在の貨幣価値に換算しておよそ17億円!)もの巨費を投じたとされており、その工事額の大きさにも驚かされるが、何より最上川舟運の開発にかかる当時の人々の熱い想いが伝わってこよう。

明治以降、鉄道や道路の発達により、河川工事は徐々に幹線航路の整備という意味を持たなくなり、代わって氾濫防止のための護岸工事という意味合いが色濃くなった。山形県はこれまでに幾度となく最上川の氾濫による水害を経験している。昭和42年8月に西置賜地方を襲った「羽越水害」は死者8名、負傷者137名、被害総額226億円にも及び県史上最悪の水害として今でも語り継がれている。現在、護岸工事は国土交通省の基幹事業の一つとされ、毎年およそ50億円前後の事業予算が付けられている。多少うがった見方かもしれ



庄内地方の田園風景（酒田市）

ないが、それだけ多くの人々が最上川というインフラの維持に携わっているということであり、県の重要な産業になっていると言える。

## 「米どころ」山形を支える最上川

農林水産省が公表している都道府県別の食料自給率（平成15年概算値）を見てみると、山形県の食料自給率（カロリーベース）は北海道と秋田県に次いで第3位の131%となっており、全国平均の40%をはるかにしのぐ値となっている。特に、米は478%（95%）と最も高く（カッコ内は全国平均値）、以下、果実159%（40%）、食用大豆143%（23%）、野菜類121%（78%）の順となっている。このことから分かるように、山形県は全国的にみても有数の農業県であり、しばしば「米どころ」、「果樹王国」などと呼ばれる。

農産物の栽培に欠かせないのが水であり、今日の農業振興はまさに最上川における利水事業のたまものであるといっても過言ではない。特に、庄内地方では江戸時代以降に新田開発が盛んに行われ、その名残として今でも「新田」という地名が数多く残っている。ただ、最上川本川からの取水となると技術的に困難だったこともあり、本格的に灌漑工事が行われたのは明治時代に入ってからのことである。明治44年に酒田市遊摺部に庄内平野第1号となる遊摺部ポンプ場が設けられ、電動ポンプでくみ上げられた最上川の水によってその右岸約600㍍の新田開発が行われた。

ちなみに、明治時代までの稲作は水田に一年中水を張ったままの湿田で行われていた。そのため肥料分が土に吸収されにくく、生産効率は著しく低かった。その後、現代のように稲刈りとともに水を落として田面を乾燥させる乾田農法が導入されたことで米の収穫量は4倍にもなったが、代わりに大量の水を水田に引き込まなければならなかった。言い換えれば、最上川本川から大量かつ安定した取水が可能となったことで山形の稲作は飛躍的に発展をみることとなったのである。

## 生活様式を一変させた作物たち

歴史的にも物流の発達と商品経済の浸透は大きな正の相関関係を持つことが知られている。山形県において商品経済の浸透を決定的に促したのはもちろん最上川舟運の発達によるところが大きい。これによって多くの農村では紅花や青芋に代表される換金作物の栽培が盛んに行われるようになった。

中でも紅花の生産は特に盛んに行われた。谷地（河北町）の「大町念仏講帳」によれば、宝暦5（1755）年の酒田着の紅花は1,100駄（1駄＝約120kg）にもなったと記されており、「最上紅花千駄」とも呼ばれて産出量の最盛期を迎えていた。ちなみに、県の推計によれば当時の作付面積は800～1,523㍍ほどであったとされている。平成15年の作付面積は259㍍であるので、現在と比較すると3倍から6倍の生産量を誇っていたことになる。また、「最上紅花」のブランドは古今東西の特産品を集めて記した「諸国産物見立相撲番付」においても見られるほど名高く、東の大関松前昆布に次いで関脇に挙げられるほどであった。最上紅花はその質の高さでも有名であり、幕末期でも1駄あたり100両（現在の貨幣価値に換算しておよそ40万円）程で取引されていた。

このほかにも米、大豆、真綿、ろう、ゴマ、葉たばこなどが最上川航路や酒田を起点とする西廻り航路を通じて京都や大阪などの上方に運び込まれ、代わりに上方からは塩、木綿、鉄、茶、干物などの物資が運び込まれた。こうした史実から考えると、当時の庶民の暮らしがいかに商品経済の中に組み込まれていたかがうかがい知ることができる。交易は経済発展の基礎的

条件でもあるから、おそらく当時の生活様式もそれまでと比べてだいぶ様変わりしたに違いない。

現在、換金作物として栽培される最も有名な作物はサクランポである。最上川の肥よくな大地ではぐくまれたフルーツの王様は、時に贈答用として大変喜ばれる。高級品の「佐藤錦」ともなれば1kgあたり1万円以上で販売されていることもしばしば見受けられるが、まさに当時の紅花をほうふつとさせる。県村山総合支庁ではサクランポの生産による経済効果を算出しているが、その効果は789億円にのぼると推計されるなど、県民経済に与えるインパクトも大きい。

## 基幹産業を支える最上川

平成14年度の県内総生産（GDP）額を見ると、その額は4兆379億円となっており、うち製造業が24%（8,648億円）を占める。かつて山形の基幹産業と言えば農業であったが、明治以降の殖産興業化によって急速に製造業が本県産業の主役となった。特に、近年の著しい工業化は昭和37（1962）年に経済企画庁（現内閣府）によって策定された「全国総合開発計画」（一全総）によって工業の分散化（多軸化）が図られたことと深く関係しているが、相次ぐ工場進出を支えたのもまた最上川であった。

工場立地の重要な決め手となるものにはいくつかあるが、進出先のインフラ整備状況もその一つである。特に安定した電力の確保と工業用水の確保は極めて重要であり、最上川を利用した水力発電や工業用水も多分に漏れず重要な役割を果たした。

最上川水系を利用した水力発電の歴史は意外と古く、明治31（1898）年に寒河江川に建設された白岩発電所が最初の発電所と言われる。その後大正年間から昭和にかけていくつもの発電所が最上川支川沿いに設けられたが、主に街灯用などの民生用としての利用にとどまっていた。ちなみに、工業用として用いられたのは大正7（1918）年に東根の奥山源蔵製穀所が電動機を使って焼穀を製造したのが初めてだとされるが、その供給源となった発電所の建設は東根村（現東根市）出身の菊池甚十郎が私財をなげうって最上川本川（東根市大淀付近）に築いたとされる。

一方、最上川が工業用水として本格的に利用されるようになったのは昭和に入ってからのもので、一全総が始まった昭和37（1962）年に酒田市遊摺部に浄水場が設けられたのが最初である。昭和50（1975）年からは酒田臨海工業団地へ供給され、その後は酒田川南工業団地へも供給されている。

現在の利水状況は国土交通省山形河川国道事務所「最上川水系流域委員会」の報告によって知ることができ、これによれば、工業用を目的とした取水量は1,353立方メートル/秒、発電用（民生用含む）は350.872立方メートル/秒となっており、上水道や灌漑を目的とした取水量も含めた合計取水量569.814立方メートル/秒の62%を占めている。

## 県民のアイデンティティー、最上川

「山形で暮らす多くの方々に、今一度、自分たちが暮らす地域の資源について見つめ直してもらいたい。」シリーズでお送りしてきた「最上川と私たち」は、そんな想いから始まっている。地域資源とはなんとも広範囲にわたる概念だが、「一県一河川」の特徴を持っている最上川を採り上げたということもあり、広く県民の方々に共感を覚えながら読んでもらえたのではないだろうか。

このシリーズでは過去4回にわたって最上川をさまざまな角度から見つめ直してきた。「水・自然」、「地形・景観」、「校歌という文化」、「産業」の各シリーズには各執筆者の視点でさまざまなエッセンスを盛り込んでみたが、残念ながら4回シリーズ全16ページを持ってしても最上川と私たちの関係をすべて書き尽くすことができなかつたのは心残りである。最上川は私たちの知的欲求に応えてくれるには余りあるほど多くの答えを用意して待っていてくれるので、それは読者の今後の楽しみとして残しておきたい。

冒頭、山形県民はアイデンティティーに乏しい県民だと述べた。シリーズを読み通していただいた読者はすでにお気付きかと思うが、このシリーズを通して浮かび上がった最上川の姿はまさしくこの地で暮らす私たちの姿そのものであり、最上川とともに生きる私たち共通の苦悩や喜びや、はたまた明日への課題などであった。この地に根付く自然・文化・歴史・産業など、最上川を通して見つめ直すだけでも改めて自分が何者であるかに気付いた方も多いのではないだろうか。多くの読者にとって県民としてのアイデンティティーをより確かなものにしていただけたのならば、これに勝る喜びはない。

最後に、このシリーズを4回にわたって読み通した読者は「私たち」と口ずさんでみてほしい。脳裏に浮かぶ“母なる川”の姿が山形への熱い想いとなって現れてこよう。その想いこそ、未来に向けた地域づくりの礎になると信じてやまない。

（荘銀総合研究所研究員 齋藤信也）